学生の嗜好色・嫌悪色の傾向
―アンケートによる2010年度から4年間の推移―

藤田　恵子

2010年度から2013年度までの4年間、ショートパンツとスカート制作を行う「服飾造形実習・演習A」の履修生に、身に着けるものの嗜好色・嫌悪色、春夏および秋冬用スカートの嗜好色、秋冬下衣の流行色などの調査を実施した。2007年～2009年にも同様のアンケート調査を行った継続調査である。

結果、これまで嗜好色として挙げられてきた黒は、2010年度から56.8％、45.7％、41.3％、26.7％と減少傾向を示し、代わって白は2010年度から27.0％、25.7％、42.9％、55.5％と増加した。学生が参考にしているファッション雑誌の代表的な『non-no』4月と10月号（2010年のみ11月号）に掲載されたスカートの白の割合を2010年からみると、29.8％、16.8％、24.6％、18.0％となっており、秋冬でも白のスカートが掲載されている。雑誌に掲載される色は学生の流行色や嗜好色に影響を与えていることがうかがえた。

キーワード：嗜好色　嫌悪色　流行色　トーン　ストリート系

1．諸言

これまでの色についての先行研究では、滝沢真美は2006年からの5年間の流行提案色と流行出現色について調査をし、赤、ベージュ、紺、白、グレー、黒などのベーシックカラーの出現頻度が高いと述べ[1]、雑誌での出現色については「2006年春夏の白は2007年に同じ無彩色のグレーに変化し、2007年秋冬には黒に変わり、2008年秋冬にも黒が継続している」としている[1]。

また、ファッション雑誌については、渡辺明日香・城一夫が、一般ファッション雑誌とストリート系ファッション雑誌に分類し、「読者リードの雑誌環境がうまれつつある」[2]と述べている。また、孫珠熙・小野幸一は、ファッションを専門に学んでいる学生のファッション意識と、ファッション雑誌の特徴について述べるとともに、雑誌の類型化をしている[3]。

本研究では、被服制作実習の履修学生を対象に嗜好色や嫌悪色の傾向と推移、およびそれらが雑誌からどのように影響を受けているかをみようとするものである。

2．方法

（1）アンケート調査

調査対象は、筆者が担当する「服飾造形実習・演習A」の履修生で、ショートパンツ・スカート制作の科目を履修した主に1年生である。これまでの研究と同様に、アンケートは前期、後期とも授業最終日に行った[4) 5)]。

表1は回答者の人数を示している。

表1．アンケート回答学生数（人）

	前期	後期	合計
2010年度	-	37	37
2011年度	14	21	35
2012年度	43	20	63
2013年度	31	14	45

東京家政学院大学現代生活学部生活デザイン学科

平均年齢は、いずれも18.7歳から18.9歳である。

設問内容は、履修する前の被服制作経験、制作したことのある作品名、履修決定理由、スカート着用頻度、ファッションの好き嫌い、身につけるものの嗜好色、身につけるものの嫌悪色、トレンドカラーなどを質問している。さらに制作したスカートについて、デザイン決定の理由、満足度、素材、模様、色の決定者、サンプルスカートの色の影響、色決定の理由、色の満足度、制作スカートのイメージ、などについて回答を求めた。

なお、アンケート調査において、学生が感じ取っているトレンドカラーや嗜好色の判定のために、次のカラーチャートを使用した。

PCCS（日本色彩研究所による日本色研配色体系）の色相から有彩色70色、無彩色５色の計75色を１色たて2.3cmよこ3.5cmのサイズにし、N7.0の台紙、よこ41.0cmたて29.0cmに貼り、番号をつけてカラーチャートにした。75色は、2:赤、6:黄みの橙、8:黄、10：黄緑、12：緑、14：青緑、18：青、20：青紫、22:紫、24:赤紫の10色相、トーンはp:薄い、ltg：明るい灰みの、d：鈍い、lt：浅い、v：さえた、dp:濃い、dk:暗い、からなっており、無彩色はW:白、Gy（グレー）:（N8.5,5.5,3.5）、Bk：黒の5色である。なお、光源は補助標準イルミナントCとした。

また、最終授業で提出したレポートには、使用した布をたて5センチ、よこ4センチ程度貼ってあるので、PCCSの199色を用いて筆者がそれらの色判定をした。

授業最終日にはレポート提出を課し、そのレポートに既製品のスカートのトレンドについて、学生が自由に選んだ店の販売員へのインタビューによる市場調査を行わせ、その結果を記載させた。従って、トレンドカラーについてのアンケートの回答は、この市場調査の結果が反映しているものと考えられる。

（２）雑誌によるトレンドカラー調査

発行部数も多く、学生に比較的多く読まれている『non-no』の2010年～2013年までの４月号、10月号に掲載されたスカートの色について、PCCSの199色に最も近似した色を視感測色して集計した。2010年の４月号は月に２回発行されており、2回分を集計した。また、2010年のみ10月号は発行されなかったため11月号を使用した。

３．結果および考察

１）身につけるものの嗜好色

身につけるものの嗜好色について、学生が２人以上挙げた回答を集計し、2010年度から2013年度の２年以上上位６位に挙がっている色の推移をみたものが表２・図１である。なお、以下PCCSの色相とトーンを用いて説明するが、無彩色を含めている。

表２　身につけるものの嗜好色

年度 / トーン等	2010 n=37		2011 n=35		2012 n=63		2013 n=45	
	回答者数	%	回答者数	%	回答者数	%	回答者数	%
浅い赤	7	18.9	5	14.3	4	6.3	5	11.1
さえた赤	5	13.5	4	11.4	9	14.3	7	15.6
薄い赤紫	2	5.4	4	11.4	9	14.3	8	17.8
浅い赤紫	4	10.8	4	11.4	10	15.9	12	26.7
黒	21	56.8	16	45.7	26	41.3	12	26.7
白	10	27.0	9	25.7	27	42.9	25	55.5

図１　身につけるものの嗜好色（トーンと色相）

2009年の調査では、多くの学生が黒、グレー、白を嗜好色として回答していたが、今回の調査では白が年々増加し、黒が減少している。また、浅い赤紫や薄い赤紫は、比較的比率は低いものの漸増傾向がみられ、色相でみると赤紫の増加が特徴的と言える。割合は少なく図１には載らなかったが、2013年度には暗い青は15.6％、さえた青は

13.3％、浅い青13.3％、濃い青11.1％で青の合計は53.3％にも及んでおり、青の人気が急増している。

そこで学生の感じる嗜好色と、雑誌掲載の色との関係をみるために、『non-no』に掲載されたスカートの色についてみることにする。（表３・図２）『non-no』に掲載されたスカートは2010年４月号（２回発行）は148着、11月号（10月号発行されず）は114着であった。2011年４月号は64着、10月号は121着であった。2012年４月号は129着、10月号164着、2013年４月号208着、10月号219着であった。

表３『non-no』掲載のスカートの色（４月､10月号）

色相＼年	2010 n=262		2011 n=185		2012 n=293		2013 n=427	
	掲載数	%	掲載数	%	掲載数	%	掲載数	%
青緑	3	1.1	2	1.0	4	1.4	19	4.4
赤紫	3	1.1	8	4.3	4	1.4	19	4.4
赤	12	4.6	14	7.6	23	7.8	19	4.4
黄みの橙	14	5.3	15	8.1	17	5.8	16	3.7
青紫	16	6.1	6	3.2	6	2.0	34	8.0
青	60	22.9	21	11.4	40	13.7	60	14.1
白	78	29.8	31	16.8	72	24.6	77	18.0
黒	48	18.3	39	21.0	89	30.4	99	23.2

図２『non-no』掲載のスカートの色（４月･10月号）

『non-no』では白が減少傾向を示してはいるが、黒と共にその割合は他の色より高い。学生が白を嗜好色とした要因として、これらの雑誌で繰り返し掲載された影響もあるのではないかと推測される。滝沢は、雑誌などの「フェミニンな白」「スタイリッシュでモダンな白」など、色についての「表現イメージ」も流行色や嗜好色に影響しているのではないかとしている[1)]。

『流行色』[6)] でも2012年2013年のネイビーの流行色について分析している。さらに、雑誌で青の掲載が多いのはカジュアルウエアとして、デニム生地のスカートが採用されることが多いことにもよると考えられる。学生が嗜好色として2013年度は青の割合が53.3％と高かったことと一致しており、ブルージーンズやデニム地などの青系の衣服がすでに一般的に着用されていることも背景にあると考えられる。

また、学生が嗜好色にグレーを挙げなかったことの要因として、一誌のみでは言及できないものの、『non-no』にグレーの掲載がほとんど見られなかったことも、少なからず影響したのではないかと推測される。

２）身に付けるものの嫌悪色

表４・図３は身につけるものの嫌悪色をトーンと色相であらわしたものである。ここでは暗い黄が次第に高く推移し、同じ色相でもさえた黄は減少していて変化は明確である。

また、さえた赤紫は嫌悪色として20 ％前後を推移しているが、浅い赤紫は嫌悪色としては減少している。同じ色相でもさえた赤紫は学生に人気がなく、浅い赤紫は好きな学生も嫌いな学生もいるようである。

前掲の図２の『non-no』に掲載された色相でみると、黄は上位に位置しておらず、赤紫は記載はされているもののその割合は少ない。この採用の仕方を見ても読者が好まない色相は誌面に登場する頻度が少ないことが読み取れる。

表４　身につけるものの嫌悪色

年度 / トーン等	2010 n=37		2011 n=35		2012 n=63		2013 n=45	
	回答者数	%	回答者数	%	回答者数	%	回答者数	%
濃い紫	5	13.5	4	11.4	5	7.9	5	11.1
さえた赤	4	10.8	5	14.3	9	14.3	3	6.7
浅い赤紫	8	21.6	5	14.3	9	14.3	3	6.7
さえた赤紫	3	8.1	8	22.9	10	15.9	8	17.8
さえた黄	4	10.8	5	14.3	9	14.3	3	6.7
暗い黄	2	5.4	2	5.7	10	15.9	12	26.7

図３　身につけるものの嫌悪色（トーンと色相）

表５　春夏スカートの嗜好色

年度 / トーン等	2010 n=109		2011 n=91		2012 n=185		2013 n=133	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
薄い	26	23.9	23	25.3	60	32.4	45	33.8
浅い	24	22.0	28	30.8	47	25.4	35	26.3
白	16	14.7	12	13.2	22	11.9	23	17.3
さえた	7	6.4	3	3.3	20	10.8	10	7.5
明るい灰みの	9	8.3	4	4.4	5	2.7	2	1.5

図４　春夏スカートの嗜好色

３）春夏と秋冬スカートの嗜好色の比較

表５・図４は春夏用スカートの嗜好色についての質問の結果を、無彩色も含めてトーン別にみたものである。薄い、浅いが、例年高く、いずれも30％前後となっている。そして白、さえた、が続いている。

また、表６・図５は秋冬用スカートの嗜好色についての質問の結果を、無彩色を含めてトーンでまとめてあらわしたものである。

暗いが圧倒的に高く、濃い、黒、鈍い、がそれに続いている。図４と図５を比較すると、春夏と秋冬の季節の違いによる嗜好色の差異は、前回も同じような結果[4]であったことから、日本では四季が明確なことにより、季節にふさわしい色のトーンとして、春夏の薄い、浅い、白、さえた、秋冬の暗い、濃い、黒、鈍い、のイメージがつくられていることが読み取れる。

２月・３月になると、まだ寒さを感じる日常でも、ファッション関連の店舗のディスプレーが、一斉に暗くて濃い冬色から春色の薄い、浅い色に変化し、また、まだ暑さの残る9月末には、鈍く、濃い冬色のディスプレーに変わる。季節の変わり目を衣類の色でも感じる。こうした季節の変化が衣類の色指向に影響を与えている。

表６　秋冬スカートの嗜好色

年度 / トーン等	2010 n=110		2011 n=99		2012 n=182		2013 n=131	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
暗い	43	39.1	40	40.4	49	26.9	34	26.0
濃い	14	12.7	23	23.2	28	15.4	21	16.0
黒	15	13.6	7	7.1	30	16.5	19	14.5
鈍い	10	9.1	12	12.1	18	9.9	6	4.6

図５　秋冬スカートの嗜好色

表７　秋冬下衣の流行色

年度 / 色相	2010 n=107		2011 n=99		2012 n=172		2013 n=116	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
青	11	10.3	8	8.1	12	7.0	14	12.1
白	3	2.8	2	2.0	5	2.9	8	6.9
赤	10	9.3	17	17.2	33	19.2	20	17.2
黒	10	9.3	3	3.0	29	16.9	20	17.2
黄みの橙	30	28.0	26	26.3	28	16.3	17	14.7

図６　秋冬下衣の流行色

４）秋冬下衣の流行色

学生が感じる秋冬下衣の流行色ついては、年度で集計をしたため、厳密には前期の最終日と後期の最終日では、両者の間には約１年のタイムラグがある。

しかし滝沢は、流行色のサイクルは「突然新しい色が出てくるのではなく、前年の同シーズン、または前シーズンに提案されボリュームとなった色を基準として、その色に合う、またはその配色がきれいに見える色が新たに提案されている」[1)]と述べており、当該シーズンの前後は似た色が出現していることから、同一年度で集計した。その結果が表７・図６である。

『流行色』[7)]で1年先に出された提案色の経年変化をみると、2009年からオレンジの色が5.6％、3.9％、6.3％、4.0％、と推移しており、学生が黄みの橙を秋冬の流行色と感じ取った時期の増減と似ている。

黒を流行色とする割合が高く、『流行色』[8)]の分析と一致している。また、赤を流行色として回答している割合も高いが、赤について1年先に出された秋冬の提案色を2009年からみると13.2％、14.2％、15.9％、15.4％と漸増しており[7)]、学生が赤を流行色と回答したのは、店頭や販売員へのインタビューなどから敏感に感じ取ったと推測される。青については１年先に出された秋冬の提案色を2009年からみると12.4％、10.9％、10.9％、11.2％となっており[7)]、それ程の増加は見られないが、春夏の変化は、2009年から16.8％、15.0％、14.5％、14.0％と秋冬の提案より多くなっている[9)10)]。青についてはジーンズやデニム人気と共に、季節を問わず嗜好色として挙げられている影響ではないかと推測される。

2013年度は白を挙げている学生に増加傾向が認められ、秋冬でも白を流行色として捉えていることが分かる。近年のファッションの傾向として、

秋冬でも薄地のレースなどの白のスカートと、黒のタイツやトレンカなどとコーディネートしている学生を目にすることがあり、秋冬でも白を身につけることが分かる。

５）学生の読むファッション雑誌

参考にしているファッション雑誌名についての回答では、「読まない」と明記する学生や、中には数種類を1人で挙げた学生もいた。

各年度の雑誌名についての回答率は、2010年度70.3％、2011年 度48.6％、2012年 度65.1％、2013年度55.6％となり、年度によってはかなりのばらつきがみられる。表８は２人以上から記載があった雑誌名を、回答の多い順に挙げる。（ ）の数字は％をあらわしている。

表８　学生が参考にしている雑誌名　（%）

2011年	『non-no』（20） 『古着Mix』（5.7） 『soup』（5.7）	『Zipper』（11.4） 『FUDGE』（5.7） 『SEDA』（5.7）
2012年	『Zipper』（19） 『Used Mix』（9.5） 『SEDA』（7.9） 『vivi』（6.3） 『Ray』（3.2） 『soup』（3.2） 『JELLY』（3.2）	『non-no』（12.7） 『mini』（9.5） 『mina』（7.9） 『KERA』（6.3） 『FRUiTS』（3.2） 『リンネル』（3.2） 『Seventeen』3.2）
2013年	『non-no』（17.8） 『Used Mix』（6.7） 『Zipper』（6.7） 『CHOKICHOKIGIRLS』（4.4）	『mer』（13.3） 『soup』（6.7） 『KERA』（6.7） 『JELLY』（4.4）

孫と小野の分類によると[3)]、『non-no』『SEDA』『mini』『soup』『mina』はナチュラル系、『FUDGE』はモード系、『JELLY』は10代GAL系、『vivi』『Ray』はお姉系、『Zipper』『KERA』『FRUiTS』はストリート系ゴスロリとしている。渡辺と城も別の方法で分類をしているが[2)]、論文発表以降若年女性のファッション雑誌は創刊が続いており、雑誌の種類は増加している。

このように若年女性をターゲットとしたファッション雑誌は、雑誌専属の人気モデルのコーディネート、読者モデルのコーディネート、一般読者のストリートファッションの掲載などを編集しており、直ぐに参考にできそうなファッションの提案をしていることが多い。

学生は主にナチュラル系、ストリート系が多く、中にはパンクやゴスロリといったかなり偏ったファッションを扱う雑誌を読んでいることも分かった。これらの雑誌に掲載されたファッションは、学生にとって等身大の情報であり、雑誌を読まない学生も、雑誌を参考にしている学生が身近に居れば、身近なモデルとして捉えられることになるのではないかと推測される。

また、この他にもアパレルの店舗でアルバイトをしている学生からの情報や、テレビをはじめインターネットなどのメディアから流行や流行色としての情報を得ているのではないかと思われる。

４．まとめ

アンケート調査は、2010年度から2013年度の「服飾造形実習・演習A」でショートパンツとスカートを制作した履修生を対象に、身につけるものの嗜好色や嫌悪色についてアンケートを行った。また参考にしているファッション雑誌名を記述してもらった。

結果、白、青、浅い・薄い赤紫を嗜好色とする割合が増加し、嫌悪色として、暗い黄、さえた赤紫の割合が増加傾向を示した。赤紫については嗜好色としても嫌悪色としても挙げられる色相であることが分かった。

春夏スカートの嗜好色は薄い、浅い、白の割合が高く、秋冬スカートは、暗い、濃い、黒が高くなり、春夏色と秋冬色の差異が明確にあらわれていると言える。

雑誌『non-no』に掲載されたスカートの色の調査では、黒、白、青の掲載が多く、学生の2013年度の嗜好色と一致しており、また学生が嫌悪色として挙げた黄は、雑誌ではあまり掲載されていないことから、雑誌掲載の色は学生の嗜好色や流行色と感じる背景になっているのではないかと推測される。

また、参考にしているファッション雑誌はナチュラル系、ストリート系などがほとんどで、そこには実際に模倣可能なコーディネートが掲載されていることが多いことから、雑誌を読まない学

生も、雑誌を読んで参考にする学生の影響を受けていると考えられ、間接的にはファッション雑誌の影響を受けることになり、雑誌の情報は学生の感じる流行色、嗜好色、嫌悪色に少なからず関与していると言える。

参考文献

1）滝沢真美：流行提案色と流行出現色の関連性－ベーシックカラーの重要性と出現パターンを探る―、国際服飾学会誌、No.44、(2013) 62－79

2）渡辺明日香・城一夫：ファッションを伝播させる雑誌メディアの変容－1990年代以降のファッション誌とファッションの関係を中心としてー、デザイン理論、50、(2007) 122－138

3）孫珠熙・小野幸一：女子学生のファッション意識と女性雑誌との関連、ファッションビジネス学会論文誌、Vol.15、(2010)　67－78

4）藤田恵子：学生の被服製作における布の色選択と雑誌のトレンドカラー、東京家政学院大学紀要、第49号（2009）　17－24

5）藤田恵子：学生の被服製作における布の色選択とトレンドカラー、東京家政学院大学紀要、第47号（2007）　41－48

6）『流行色』日本流行色協会、No.570、(2012) 12、13

7）『流行色』日本流行色協会、No.571、(2012) 18

8）『流行色』日本流行色協会、No.572、(2013) 20

9）『流行色』日本流行色協会、No.569、(2012) 20

10）『流行色』日本流行色協会、No.575、(2013) 21

（受付　2014.3.24　受理　2014.6.2）